



| | |
|---------------------|---|
| Title | 自閉スペクトラム症の感覚処理傾向と発話聴き取りの特徴について [論文内容及び審査の要旨] |
| Author(s) | 柳, 民秀 |
| Degree Grantor | 北海道大学 |
| Degree Name | 博士(教育学) |
| Dissertation Number | 甲第15803号 |
| Issue Date | 2024-03-25 |
| Doc URL | https://hdl.handle.net/2115/92373 |
| Rights(URL) | https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/ |
| Type | doctoral thesis |
| File Information | RYU_Minsu_review.pdf, 審査の要旨 |



学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（教育学） 氏名：柳 民秀

審査委員 主査 教授 安達 潤
副査 教授 池田 一成（東京学芸大学）
副査 准教授 齊藤 真善（北海道教育大学札幌校）
副査 教授 関 あゆみ

学位論文題名

自閉スペクトラム症の感覚処理傾向と発話聞き取りの特徴について

本論文は、近年、自閉スペクトラム症（以下、ASD とする）の症状として注目されている感覚問題に焦点を当て、ASD の発話の理解困難との関連性を実験的に探求したものである。

ASD の感覚問題については、疫学的調査や当事者の体験に関わる調査研究は行われているものの、実験研究では感覚・知覚レベルの刺激による研究が多く、認知レベルでの研究は未だ途上である。本論文は ASD の感覚問題と認知レベルの症状である発話理解の困難との関連という、認知処理への展開を意図し、研究 1「ASD の感覚処理傾向と自閉症特性との関連性」、研究 2「ASD の感覚処理傾向と発話聞き取りにおける音高知覚・間隔知覚との関連性」、研究 3「ASD の感覚処理傾向と発話聞き取りの困難性および発話に含まれる単語認知特徴との関連性」を検討する 3 つの研究で構成されるものである。

研究 1 では、ASD 診断群と自閉症スペクトラム指数（以下、AQ）による高 AQ 一般群・低 AQ 一般群の 3 群に感覚プロフィール（以下、AASP）を実施している。結果、AASP の全スコアおよび低登録・感覚過敏・感覚回避の下位スコアでは低 AQ 一般群が他 2 群よりも有意に低値で、感覚探求スコアでは低 AQ 一般群が高 AQ 一般群よりも有意傾向で高く、感覚探求以外の感覚処理傾向が ASD 特性とおおよそ対応していることが示された。

研究 2 では、発話理解に関わる低次処理プロセスの検討として、発話聞き取りの際の音高・間隔知覚の特徴と AASP および AQ との関連を ASD 群と非 ASD 群で検討している。結果、非 ASD 群は日本語の意味理解に重要な間隔変化に音高変化よりも注意を向ける一方、ASD 群は音高・間隔の音声変化への注意に差がないことが示された。また AASP の低登録スコア低群が音高変化よりも間隔変化に注意を向けることに加え、AQ 全スコア、コミュニケーションと想像力の下位スコアと間隔変化検知が負相関を示した。以上、音声変化検知課題という低次の処理においても意味に関連する音声変化を優位に検知する非 ASD 群、意味に関連な

く音声変化を検知する ASD 群という遂行の差異が示され、ASD 群の遂行には低登録傾向やコミュニケーション・想像力の ASD 特性が関連していることが示唆された。

研究 3 では、発話理解に関わる高次処理プロセスの検討として、複数の文章で構成された発話の理解度および発話に含まれる単語の記憶と AASP および AQ の結果との関連を ASD 群と非 ASD 群で検討している。刺激文は発話内容が意味的に一貫する複数文の合間に意味的に非関連な文を挿入する構成で、適切な発話理解には関連文の情報をつなぐ必要がある。結果、理解度は非 ASD 群が高かったが群間差は有意傾向に留まった。単語記憶は非関連文でのみ非 ASD 群が ASD 群より有意に高く、群別では ASD 群では関連文が有意に高く、非 ASD 群では 2 つの文種がほぼ同等であった。また AASP の低登録スコア高群が低群よりも理解度が有意に低い、低登録と感覚回避の高群で関連文の単語認知が非関連文より有意に高い、非関連の単語認知が高いほど理解度が高いとの結果であった。以上、ASD・非 ASD 両群は発話の理解度はほぼ同じだが、ASD 群は関連文の単語のみに注意を向け、非 ASD 群は関連文・非関連文の両方の単語に注意を向けること、低登録と感覚回避スコアの高さが関連文にのみ注意を向ける傾向と関連していることが示された。

審査委員会が評価した本論文の意義は以下である。第 1 に低次の感覚処理特性と高次の発話理解の関連を一定程度示したこと、第 2 に ASD 特性と感覚処理特性との大凡の対応性を示したこと、第 3 に全体処理・部分処理の観点からの考察により、全体的統合が ASD の本来傾向として弱いものの条件次第では可能であるとの知見の再確認に加え、新たな知見として「全体的統合を行うために非関連情報を除外する」という非 ASD と異なる ASD 独自の方略を示したこと、第 4 に実験デザインに高いオリジナリティがあることである。

一方、本論文の課題は、以下である。第 1 に結果の分析と解釈が網羅的で、論文主旨の明確な記述が不十分であった。第 2 に協力者数の限界はあるが、ASD 特性と感覚処理傾向の対応性について相互の重なりを整理する統計的手法など、もう少しクリアな分析が望まれた。第 3 に課題設定上 ASD 協力者が言語能力の高い者に限られており、本研究で得られた知見を、ASD の連続体を考慮する考察が期待された。第 4 に全体的統合処理の ASD 群の方略と非 ASD 群の方略に関する考察について、既存の研究知見をベースにもう一步踏み込んでもらいたかった。特に、言語能力が高い ASD 者の日常における適応不全との関係を論じることができたように思われる。

これらは今後に残された課題ではあるが、新たな知見とともに、これらの課題の存在を本研究領域に明示した点で、本論文の意義は高く評価されるべきである。よって、審査委員会では著者が北海道大学博士(教育学)の学位を授与されるに値すると認めるに至った。